



(右上から時計回りに) 餌が十分にとれていて、濃い緑色をしたコノハミドリガイ▶餌が足りないと、体の色が白くなる▶食べ物ハハネモという緑色の海藻

## コノハミドリガイ

学名 *Elysia marginata*

食べ物 ハネモ類(緑藻)  
生息地 インド洋から太平洋の海  
全長 最大10センチ程度  
特徴 巻き貝の仲間であるウミウシの一種で、日本近海で目にすることができる。特に鹿児島湾では、毎年夏の終わりごろから1センチほどの小さなものが出現し始め、ハネモ類を食べて春にかけて成長していく。本州など他の海域では通常体長2~5センチ程度のもが多いが、3月の鹿児島湾では10センチを超える大きなものも多く、日本屈指のコノハミドリガイの研究地となっている。海藻を食べるため、浅い海の穏やかな海域で特に見られる

## 光合成する能力備える

植物は光を受けて自ら栄養を作って成長します。「光合成」という仕組みで、栄養を作る工場を「葉緑体」といいます。コノハミドリガイは葉緑体を一時的に体に

ためるにより、普通の動物はできない光合成ができる不思議な生き物です。餌になる海藻に含まれる葉緑体を、消化せずに一定期間持つていられます。葉緑

体のある間は、太陽の光で栄養を作り出して生きていきます。数日間餌が見つからなくても、他の餌場に移動したり、海藻が育つまで待つたりすることもできます。コノハミドリガイをはじめとしたウミウシの仲間「囊舌類」の特殊能力です。

元々、コノハミドリガイは海藻で、その成育状況によって体の色や大きさが変わります。ハネモは秋から冬にかけて茂り、春以降は少なくなります。このため、夏前には色が抜け、個体数も減ります。

## おもしろ生き物図鑑

かごしま水族館から

無色半透明ですが、たくさん葉緑体を取り込むと、葉緑体の色である緑色になります。餌が十分にあるときは緑色が濃く、飢えているときは白っぽい色になります。

このように、植物から葉緑体を取り込むことを「盗葉緑体現象」といいます。多くの研究者が興味を持ち、この現象について調べています。人間が葉緑体を利用できるようになるかといったユニークな研究もあり、成功すれば、人類の未来が切り開かれるかもしれません。(展示課魚類展示係・西田和記)